

ポスト「郷土中国」を生きる中国農民の主体性 —生活論的アプローチから討究する「離土離郷不離農」—

ZHANG MANQING

中国農村において、1980年代の改革開放と「生産請負制」の実施後、農村全体が近代化の波に巻き込まれ、農民層分解と耕・畜分離による畜産廃棄物汚染や、化学肥料の過剰施肥による環境問題と呼ばれる「農業面源汚染」が深刻化してきた。その背景としてのポスト「郷土中国」は、従来の「郷土中国」を基盤としながらも、近代化がもたらす農民の流動化が激しくなり、複雑で混合的な状態である。既存研究では、現段階の農業・農民の諸々の変化を意識して、農業面源汚染にかかわる畜産廃棄物処理と施肥の諸行動を部分的に検討している。しかしながら、社会転換期の構造的変化とガバナンスに注目する中国環境社会学の学問上の特徴および、中国農民を捉える枠組みの固定化などにより、主体である中国農民の視点はいずれも見当たらなかった。具体的にいえば、社会の荒波に応じて生計を立てながら、伝統的な「郷土中国」から継承された知識や農法を維持してきた農民の主体性を真正面から検討する研究の余地が残される。また、農民の主体性と経験知に大きく影響を及ぼしている集団農業時代の農法近代化の歴史への考察の空白が存在している。

そこで本論文では、「農業面源汚染」に対して既存研究の「主体」の不在という課題を克服するために、改めて生活論的アプローチから農民の主体性を再考していくことを主たる目的としている。具体的には、ポスト「郷土中国」の「離土離郷」の実情、及び「郷土中国」との連続性を念頭に置く。そして一時点の農民の処理行為あるいは施肥行為から考察するのではなく、かつて農業・農地に付き合ってきた歴史による蓄積された実践知、行為や選択の背後で言い表せない葛藤など、行為の奥にある過去に記憶されている時間の蓄積という経験のレベルまで踏み込んで、農民に維持されてきた「農」の一面に着目した。特に内陸の農民の経験知と「文字」に依拠した科学的な判断基準や「標準語」とのギャップを乗り越えるために、方言から掘り下げて、マイナー化している有機的な伝統農法の詳細をあぶり出すことができた。それを踏まえつつ、畜産廃棄物の処理及び農民の施肥における経験知の継承、農民の主体性が政策や社会情勢に応じて変化していく「主体性の可変性」といった様態を明らかにし、ポスト郷土中国ならではの「農」を再考した。

本論文は、8章から構成され、序章に続き、第2～3章では先行研究とその課題の整理を行った。第2章では、まず、農業面源汚染に関わる主な二つの主体である大規模畜産業の畜産廃棄物処理及び耕種業の施肥行為を議論する整理していたうえで、既存研究で見過ごされてきた農民の「主体性」問題を提起した。続く第3章では、「主体の不在」の課題をめぐり、農民の「主体性」研究の蓄積が豊富な日本にて論じられてきた「生活論アプローチ」を参照していく。すなわち、日本環境社会学の生活環境主義などで強調してきた生活者の立場(鳥越 2018、足立 2018)、農村社会学・農業社会学のうち、百姓のまなざしを提唱する新しい農本主義(宇根 2007)や経済目的の農業と一線を画した生活農業論(徳野 2011)などは、農民の主体性を論じるために重要な理論基盤となると考えられ、これらを包括させ本研究では「生活論的アプローチ」と称することにしている。一方で、農民の「主体性」の議論のために、日本で培われてきた研究視座をそのまま中国の事例に援用できない現実的な課題について、社会転換期の構造的変化とガバナンスに注目する中国環境社会学の学問上の特徴を整理することにより明らかにしている。その一方で、近年主体性とは明言されないものの、人類学・民俗学的研究という関連分野の事例研究から中国農民の行動ロジックに正面から向きあう研究が現れており、これらの関連研究も整理した。最後に本研究が生活

論的アプローチを援用する意義を明示したうえで、中国の実情に即して留意すべきところ、つまり「ポスト「郷土中国」における「農」と「農業」の非並列的關係」と「中国農民が経験した特殊な農法近代化」という二点を論じている。

続く第4～7章では、農業に関わる主体ごとに展開してきた研究内容と結果を示している。すなわち、中国の農民の生業・生計は多様化してきている現状に鑑み、現時点において①大規模畜産業、②大規模耕種業、③世帯間分業を基礎にした「半工半耕」、④「アウトロー」的な「農」という農作業に関わる4つの農民の生計・生業類型に分け、それぞれの類型ごとに、研究を展開した。また中国華東地域に位置する安徽省南部農村地域及びN県を主要調査地として選定し、農民層分解と畜産廃棄物の処理と施肥の実態について、2016～2022年にかけて断続的に調査を重ねることを通じて解明してきた。加えて、歴史資料や村民委員会の内部資料に基づいた資料分析も行った。最後に第8章の総合討論により結論を導いている。

第4章では、農民層分解と耕・畜分離といったポスト「郷土中国」の事象に着目し、大規模畜産業、大規模耕種業、小・中規模の耕種業のそれぞれの実態を明らかにした。安徽省のような内陸農村において、耕・畜の主体が分離しても、畜産廃棄物の肥料としての価値は、耕種農家も畜産農家もともに長期的な農業実践のなかで心得ていた。また畜産業が規模を拡大した後に廃棄物が多量に発生した状況下において、一部の畜産業者が可能な限り工夫を凝らし畜産廃棄物を肥料資源として農地還元できていた。しかし、政策の要求を満たしていながらも、農地還元がうまくいかない事例も見受けられ、その中には、農民の主体性が見えているが、それが無視されている画一的な環境政策の限界性も明らかになった。また、耕種農民も社会の近代化という大きなうねりを生きるうえで、施肥行為が生産量の確保という生存維持上の大きな課題とも関わってくる。特に、大規模耕種業が直面する構造的制限下の経営の苦境と肥料選択における至難の実情を考察した。各規模の耕種業の農法の違いを包括的に把握しながら、これまで見過ごされてきた、インフォーマルな肥料調達システムにおける農民の実践を通して、有機肥料市場の空白を補ってきた事実を明らかにした。つまり、構造的制限がある中で、小・中規模の耕種農民は、マイナー・サブシステムとして後景化した「地」の栽培のためには、伝統的な「農家肥」の工夫をしていたのである。ただし、「地」における伝統的な農法が根強く存在するが、規模の微細さ及び方言により、外から発見されることは難しいと言える。

続く第5章では、中国農民の主体性にはその歴史的な根源を持つことを農法転換の歴史的経緯から明らかにした。特に農村社会全体の近代化、肥料農法の近代化などの時間的推移が複数あるという重要な視点を詳述した。『人民日報』を中心とした資料調査から、中国の農村社会が歩んできた独自の農法転換の歴史を整理しつつ、中国農民の農業生産や肥料使用に重大な影響を及ぼす農家肥と「土化肥」の実態について、集団農業時代という特殊な時代背景との相互作用に触れながら明らかにした。農業集団時代に経験した漸進的な農法近代化に遡り、当時は主体性(Agency)を超えた「創発性(Autonomy)」があった事実を見いだすことができた。また、当時の農法転換の経験者への聞き取り調査を通して、中国農民の化学肥料に対する知識は、長年にわたる土化肥の実践により蓄積された身体知・経験知に等しいものがあり、彼らの化学肥料に対する防衛的な姿勢や農家肥への見えない堅持、さらには「土化肥」の時代を超えた影響について究明した。そのうえで、農民の立体的な肥料観、つまり、伝統肥料(有機農法)と化学肥料(近代農法)という二項対立構造を超えて、むしろ連続性・重層性があることを示唆している。ただし、「行為」レベルにおいて、実際の施肥行為は様々な客観的な要因や制限に影響され、肥料農法における主体性が一時的に機能できなくなる傾向も見られた。

こういった制限を受けていない事例として、第6章で論じた「アウトロー」的な「農」が挙げられる。生業構

造の変化と非農業戸籍への転換などの背景の元で、農民出身者は、都市住民に転身したにもかかわらず、都市での芝生や空き地で野菜を育てるという「アウトロー」的な行為を行っている。耕作者は外発的要因により生活空間が都市に移ったとしても、以前の経験知を活かしながら農家肥の使用を主体的に維持していることが見えてきた。農家肥及び農業に対する農民の意味付与は、経済面を超え、自ら「農的つながり」の再構築および自分のアイデンティティの再確認に見いだされる。本来手間のかかる農家肥は、都市空間において更なる苦勞を要すると考えられる。それらを踏まえ、土地や故郷から離脱したとしても農からは離脱しないという「離土離郷不離農」現象と、その背後にある自ら「農」を生成していく論理を提起している。さらに言えば、構造的制限下の選択（「行為」）とは別に、経験レベルに埋もれた農民が本来持ってきた肥料に関する経験知及び主体性が「アウトロー」的な「農」に限って、顕在化してくるのである。特に、「アウトロー」的な「農」では、「農業」と区別する「農」の本質が凝縮されていると筆者は考えた。

さらに第7章では、中国内陸農村出身の70代以上農民のライフストーリーから、社会の激変と農業変容を経験するなかで、「生きた」農業近代化や流動化の経験を農民の立場から通時的に再解釈することを試みた。それを通じて、社会変容の渦中に置かれた「農民」は「離土」や「離郷」といった外側から容易に見られる職業と住所の変化のほかに、農民が社会の変容に応じつつも、これまで見過ごされてきた、「農」をできるだけ堅持しようとする内面の葛藤と主体的な選択を明らかにした。こうして、社会転換の荒波が一人ひとりの農民に押し寄せてくる際に、個人がそれに応じて主体的選択をした結果により、現時点における生計は共時的多様性を示している。現在の生計類型には典型的な半工半耕のほか、企業化した大規模農業（飼育や耕種）、「工」への転身、「アウトロー」的な「農」などもある(図1)。さらに、農民の一生という長期的スパンで見ると、常に社会の変化を生きる中で、家族の生計状況に合わせて順応する通時的流動性も見られた。すなわち農民は、順応して「離土」や「離郷」で対応しているように見えるが、その一方で、農法の「棲み分け」により、変わらない芯としての「農」を維持し続けているのである。さらに「農」に対する農民の意味付与について、「農」と「農業」との違いに触れつつ、「農」にこそ内包されている生活者の主体的選択があることを論証した。

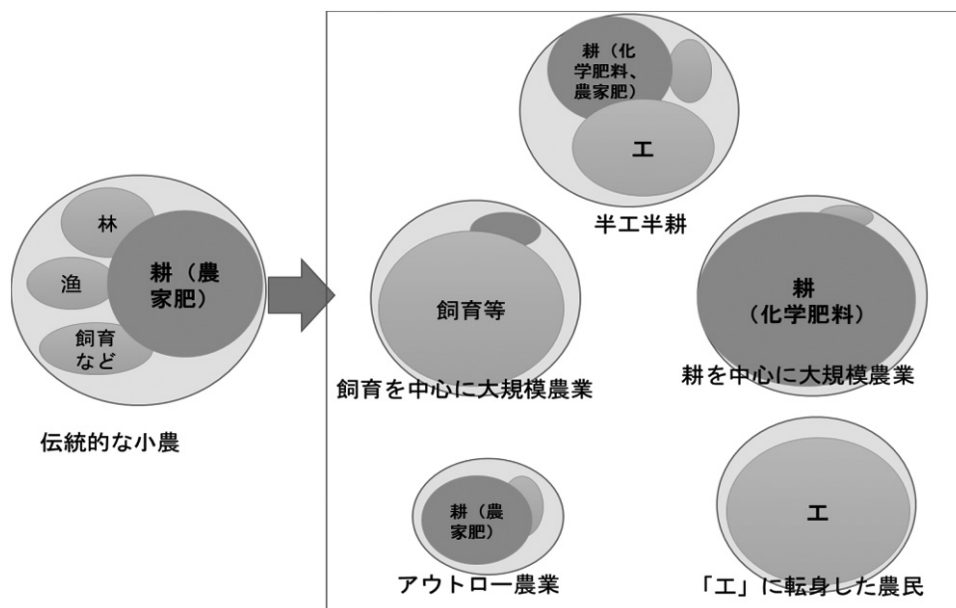


図1. 生業類型のイメージ図(筆者作成)

終章では、ポスト「郷土中国」ならではの農民の主体性の様態を論じたうえで、新たな農民像を提起した。農民の主体性の一面は確実にありながら、政策などの外的要因に対応して、主体性は構造的制限により潜在化したり、主要生業・生計の背後に隠れていたりすることについて、本論文では、それぞれの主体性が呈した状態について「潜在性(Potential autonomy)」並びに「隠在性(Hidden autonomy)」を提起した(図 1)。まず、主体性の「潜在性」は、経験に培われた濃厚な経験知により、農民が農法に対する自律的な認識を抱きながらも、一時行為には発揮できない、反映しにくい状態を指す。この「潜在性」を前提に、主体性は、「アウトロー」的な「農」というような隙間を見据えて、随時蘇る可能性(限定的顕在性)を秘めている。また、「隠在性」とは、主体性が存在し、発揮されてもいるが、隠れた場所にある状態を表す筆者の造語である。構造的制限に直接に影響されやすく、変化が著しい「産業としての農業」に注目が集まるが、農民の主体性はそれと区別した「農」にあるということである。しかし、「農」の部分のマイナー性や方言の壁により、行為レベルだけでは辿りつかないために捨象されてしまったと言える。

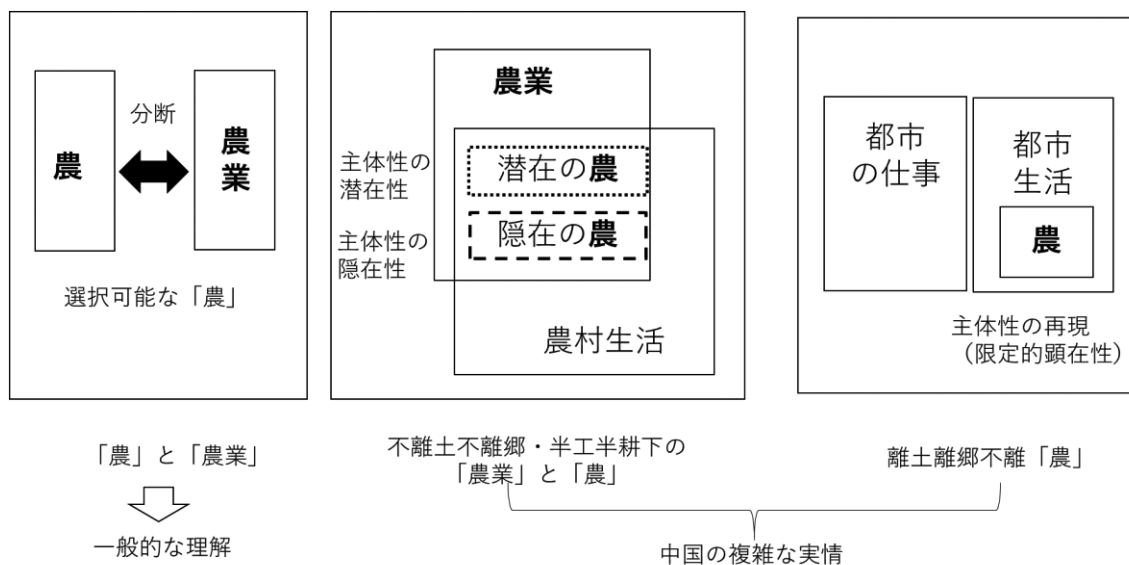


図 2. ポスト「郷土中国」ならではの主体性の「潜在性」と「隠在性」(筆者作成)

最後に、「農」をポスト「郷土中国」の実情を踏まえて再定義した。まず、外在的な形式について、経済的目的を超えた生き方、特に代表的なのは、伝統的な「農家肥」をあえて工夫を凝らして維持してきたことである。外在的な形式を頼りに、農民の主体性が発揮されているかどうかを確認できる。また、内面化された本質は、「郷土中国」からポスト「郷土中国」の連続性を生きる中で、土との深いかわりの歴史から培われた経験知および土地への執着である。「農」は看過された根本的な原因について、農民のステレオタイプな捉え方が浸透するなか、農民を見る際にまた行為レベルにのみ注目してしまい、つまり視角がさらに固定化し、結果的に農民の行為がやはり無知であると判断するような、農民に対する「偏見の再生産」の発生によると論じている。しかしながら、本研究が提示した「潜在の農」と「隠在の農」から再考すると、上述したステレオタイプが表すものは、あくまでも農民の行為レベルや一側面に過ぎないと言える。すなわち「農」こそが、農民に貫かれている本質である。中国農民をさらに深層から理解するために、新たな中国農民像としての「離土離郷不離農」という視角を提供できることを期待したい。(環境行動学)